

私が高校時代に書いたショートストーリー全文を掲載いたします。
在籍していたのはキリスト教系の女子校でしたが、その教えとは
あいれない創作文を提出したところ、年に1回発行される学園誌に、
なぜか掲載されたものです。

生物Ω

人間の手によって、無機物から有機物が作り出されるようになってから、既に三百年年月がすぎている。その間、色々なより高度な生物体を作り出されたが、いまだに進化の謎は解き明かされぬままであった。

博士は、この二十年間、その謎を解くべく研究室にとじこもり実験をくり返していた。

彼は、これまで作り出された多くの生物体から、最も下等でしかも微小で、世代交代の最も早いものをえらび、まず無機物からこれを作るところから始めた。その後、幾度もの世代交代をくり返すうち、その中からいくつかの変わったものが生まれ、進化らしいものが見られるようになって行った。最初の五年間は、いかに世代交代が速いとはいえ、それほど大きな変化はなかった。六～七年たつにつれ、始めのものとははっきり違った、より高等な生物が現われ陸上に住み、より下等な生物を食物として繁殖して行ったが、生物界のバランスはまったくみごとに保たれていた。博士は、これらの模様を論文にし、学会へ次々と発表し、その名声は世界中に広まって行った。実験室では次々と進化が進み、実験開始当時から二十年たつ今では既に、ホ乳類らしきものが現われ出していた。

ある日、博士はその最も高等だと思われるものにΩ（オメガ）光線をあてて、人工的に突然変異を起こさせてみる事にした。これは、かなりの冒険であった。へたをすれば、これ迄の実験がすべておじゃんになってしまうかも知れないからである。光線を当てて間もなく、はっきりその影響を受けたと見られる生物が

生まれた。博士はこれに「生物Ω」という名前をつけた。それは、これまでの生物と多少違った形はしていたが、からだも小さく、始めは他の生物のえじきにされたりしていた。ところが生物Ωは次第になにやらこれ迄の生物とは違った力を発揮し出して、自分より大きな生物を捕らえては食物とし繁殖していった。そして加速度的にその勢いは増すばかりであった。博士はそれを見てなにやら恐ろしい気がした。そしてやはりΩ光線をあてたのは間違いだったのではないかと思いはじめた。しかしその生物の動きは、限りなく博士の興味をそそり、彼の目は自然と生物Ωに多く注がれるようになって行った。ところが、それらは他の生物を自分では食べきれないほど殺し始め、そればかりか、食物の不足状態でもないのに互いに殺し合いを始める始末であった。それはこれまでの生物には見られない現象であった。生物Ωは、これまでの生物が生まれながらにして持っていた自然のバランスを保ちつつ生きて行くという本能をΩ光線によって失ってしまったようであった。その上、悪いことにΩ光線の為に、恐るべき力を持ってしまったのであった。博士は今の内に何とかしなければ、その内この生物以外の殆どの生物が死に絶え、そうなれば生物Ω自体、無機物から有機物を作り出す能力を持っていないので死に絶えてしまうに違いないと思った。

そこで彼はそれらを殺してしまわなければならないと考えたが、なぜか彼はこの貪欲で、無秩序な生物に愛着を覚えるのだった。

この実験に注目する各界からは、博士が自然の進化にまかせず、人工的に変異を起こさせた事、そしてその結果、自然のバランスを保つ本能の欠如した奇形児を作ってしまった事に対し、強い批判の声が起こった。これによって自然の進化の方向が狂い、人間がいかにして誕生したかという重大な謎が明かせなくなるというのであった。博士ももちろんそういう批判を聞こうとしない訳ではなかったが、このΩ光線によって生まれた小さな、けれど恐ろしく貪欲な怪物への限りない興味は断ち切る事ができずにいた。

ところが生物Ωの一部が、今度はどこからともなく訳のわからない物質を発散させて、他の生物を壊滅寸前に追い込み、そればかりか、生物Ω自体もその凄まじい猛毒のおかげで弱り始める始末であった。にもかかわらず、生物Ωはそれさえ気にもしない様であった。

博士は、今度こそ自分の過ちを認めざるをえなかった。Ω光線をあてたばかりに、ひどい事になってしまった。Ω光線は死の怪物を生んでしまったのである。彼はここで、このまま自然に死滅するのを待つか、自分の手によって怪物を殺すかを考えた。けれど博士はこの怪物にいい知れぬ愛着を持つが故に、苦しむのにまかせてはおけなかった。それに、他の生物も生物Ωさえいなくなれば、今ならまだ立ち直れるみこみがあった。そこで彼はひと思いにこの増えすぎた怪物を殺してしまうことに決めた。

スイッチが押され、多くの発射口から特殊光線が発射された。博士が以前から研究していた生物Ωだけを死滅させる光線である。生物Ωは苦しむ間もなく一つ残らず死滅し、後には死骸さえ残らなかった。

博士は、この怪物についての論文を発表し、学会で絶賛をあびたが、彼の顔は、なぜかひどく沈んでいた。

記者会見が行なわれ、最後に一人の記者が尋ねた。

「これからも、その実験は人間誕生まで続けられる訳ですネ？」

博士は首を左右にふりながら静かに答えた。

「もう、その必要はありません。人間の誕生の謎は明かされたのです。あの怪物こそ、われわれ人間以外の何物でもないのですから。」